

# 虹の架橋

### 大間々四丁目常夜灯が建立200年 岡商店前で笠懸町横町太々神楽を開催

文化9年(1812)、銅(あかがね)街道の宿場町・大間々4丁目に建立された常夜灯が今年で200年目を迎えます。「三方よし」の会では、これを記念して、5月26日午後5時から、4丁目いきいきセンター前で200年記念式典を開催し、午後5時半からは、岡商店の白壁蔵の前で、みどり市指定重要無形民俗文化財でもある、笠懸町横町太々神楽を開催致します。古い町並みの中で演じられる太々神楽の伝統の舞いと笛や太鼓の音色をお楽しみ下さい。



旧・銅街道の本町通りに設置されている5基の常夜灯には建立された年が刻まれています。1番古い4丁目常夜灯が文化9年に建てられ、その後、5丁目、1丁目、3丁目の順に毎年1基ずつ増設され、2丁目常夜灯が13年後の文政11年に造られました。四丁目の常夜灯には、火伏せの



神として知られる「秋葉山」の文字が刻まれています。今回開催する横町太々神楽も秋葉山本宮・秋葉神社の奉納神楽としてはじまりました。大間々と笠懸で別々に守り続けてきた秋葉山信仰の2つの文化が今年はじめ顔を合わせます。みどり市の三方よしは、「人よし、水よし、空気よし」であり、「大間々、笠懸、東よし」の三方よしでもあります。



### 小耳にはさんだ いい話

(文責・靖) 《201》

「虹の架橋200号達成」のお祝いに仙台在住の「言の葉アーティスト」渡辺祥子さんと、菅野孝則・久仁枝さんご夫妻から『花の冠』(朝日新聞出版)と『海の石』(光文社)という2冊の詩集を頂きました。渡辺さんや菅野さんとも親しい著者の大越桂(おごえ・かつら)さんは仙台在住の詩人で、表題作の「花の冠」は、東日本大震災の1カ月後に書かれた詩です。一昨年、大間々東中学校の立

## 『花の冠』

志式でピアノを演奏してくれた松浦真沙さんがこの詩に曲をつけ、復興支援チャリティコンサートでの合唱曲として発表しました。桂さんの詩の中には「津波」や「地震」や「頑張ろう」といった言葉は出てきませんが、みんなで心をひとつにして歩んでゆこうという優しい気持ち伝わってきます。去年10月、野田佳彦首相が、所信表明演説の結びに「花の冠」の一説を引用し、「希望の種をまきましよう」と語ったことでこの詩は更に注目を集めました。

## 『花の冠』

嬉しいなという度に私の言葉は花になる  
だから  
あつたらしいな種をまこう  
小さな小さな種だつて  
君と一緒に育てれば  
大きな大きな花になる  
楽しいなという度に私の言葉は花になる  
だから  
だつたらいいな種をまこう  
小さな小さな種だつて  
君と一緒に育てれば  
やさしい香りの花になる  
花をつなげたかんむりを  
あなたにそつとのせましよう  
今は泣いてるあなたでも

## 世界一小さな 定利屋 トイレ美術館



富田栄子さん『イラスト葉書』  
今月の作品 《201》

15年前、旧・大間々町と旧・鳩ヶ谷市の姉妹都市締結がきっかけとなって、鳩ヶ谷在住の富田栄子さんと知り合いました。それ以来、毎月、虹の架橋を発行するたびに、富田さんから素敵なイラスト入りのハガキをいただき、その文面に励まされ、イラストに癒されています。今月は、富田栄子さんからいただいたハガキをトイレの中に1枚、そして、足利屋の休憩コーナーにまとめて展示させていただきます。足利屋には、『虹の架橋文庫』もあり、「花の冠」や「海の石」の詩集もお貸し致します。

## 笑顔の花になるように

1989年生れの大越桂さんは819gの超未熟児で生れ、重度脳性まひ、未熟児網膜症による弱視など、重度重複障害児として過ごし、13歳で気管切開により声を失い、筆談による言葉のコミュニケーションが続いています。

十数年前、シスターの渡辺和子さんから素敵な言葉を教わったのを思い出しました。『天の父さま どんな不幸を吸っても 吐く息は感謝でありますように 全ては恵みの呼吸ですから』

## 靖ちゃん日記

4月5日(木)  
60回目の誕生日を迎えた。娘の恭子と、しよに光栄寺に墓参りに行った。本堂の前の方垂れ幕が、これから咲くところだ。た。たまごまのこ。思ひ出す桜かなと松尾芭蕉が詠み、世の中は三日見ぬ間に桜かなと大島蓼太が詠んだ。桜は一瞬と永遠を連想させる花。「ありとどろに見た桜」の思い出を心に残しておきたいと思った。姉弟から還暦のお祝いに花が届いた。和子と恭子と彰人から赤いチャンちゃんゴと帽子をもらった。チャンちゃんゴの背中には金色で「寿」の文字が入っていた。ネクタイとベルトももらって、早速使いはじめた。赤いチャンちゃんゴと帽子をかぶり、みんなからもらった花の前で写真を撮った。花咲か爺さんの気分。鏡を見たら、小太り爺さんになった。なごめりて思いついた。還暦とかけて「徒然草」と解く。そのころは「健康」(吉田兼好)のことが頭に浮かびます。格調高貴!

## タンポポの綿毛にならむ風の旅

タンポポの黄色い花は咲き終えた後に茎を伸ばし、丸くて白い綿毛になり、風に乗って飛んで行きます。星野富弘さんの「タンポポ」という詩の中に「人間だつてどうして必要なものはただ一つ、私も余分なものを捨てれば空が飛べるような気がしたよ」という言葉があります。私達はいろいろなことにとらわれ過ぎたり、こだわり過ぎたり、かたより過ぎたりして、いるのかも知れません。タンポポの綿毛のように、迷いを捨て、風にまかせて旅をするのもいいかもしれませんね。

虹の架橋を検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第202号は6月1日(火)発行予定です。

♡ やつちゃんの似顔絵提供：ひさかさん

